

## □ 書 評

A. V. Hill 著；若林 勲，津山千鶴子 訳  
**科学の倫理的ディレンマ**  
 A. V. Hill 教授小論集

京都大学教授 時 実 利 彦

この書物は、1922年に筋肉収縮の研究でノーベル賞を受けた、世界における生理学の最長老である英国のA. V. Hill教授の“The Ethical Dilemma of Science and other Writings”(1960)のなかの論文で、現在のわれわれに関心のある部分をえらんで訳されたものである。

さすがは、高名な生理学者であると同時に、科学全般に対する高い識見と政治に対する深い関心の持主のヒル教授であることが、この書物の内容からはっきり汲みとれる。

5部にわかれている。第1部は、「科学の倫理的ディレンマ」という題で、6つの講演を集めてある。なんといっても圧巻は、この書物の題になっている「科学とその倫理的ディレンマ」である。科学が進歩すれば人類が幸福になるが、科学の進歩のなかに、放置すれば人類を破滅に導く因子が内在することを厳しく指摘した1952年に英国科学振興会で行なった講演であって、「われわれの研究の倫理的基盤を考慮することは、市民としてわれわれのなすべき義務である」と説く教授の鋭い言葉は、20年後の現在のわれわれもゆめ忘れてはなるまい。また、「科学と魔力」は、「大学の本質」という副題がついており、ヒル教授のロンドン大学に対する限りない愛情が吐露されており、われわれ大学人の一読に値する文章である。

第2部は「にくまれぐち」という題で4篇が集めてあ

り、生体解剖反対者に対する手厳しい批判や、英国の医薬界の状況に対する公憤が述べられている。

第3部は「思い出のひとつ」という題で、生理学の教科書にでてくる世界的な生理学者14名について思い出をかけた興味深い友交録である。

第4部は「2回の大戦中の科学」という題で、2篇が集めてある。そのうちの「科学と秘密」は、日本に原爆が投下された後に書かれた論文であって、「われわれ科学者はあまりに長いあいだ、“控えの間のボーイ”としてあつかわれてきた。“会議のメンバー”とあってこそ、われわれは政治に影響力をもつことができる」というヒル教授の言葉を、われわれは決して聞きながしにしてはいけない。第5部は「英連邦における科学」という題で、ヒル教授がインド政府科学顧問としてインドに滞在し、実地に見聞したことから、インド民族の将来を憂えた2篇を集めてあり、これが「科学の倫理的ディレンマ」の発想の契機になったのであろう。

名文であるだけに難読なヒル教授の文章を、こんなに読みやすく訳していただき、思想家としてのヒル教授の英知と達識に接することのできるよすがを作っていただいた訳者に心からお礼を申し上げたい。

A 5・頁 230・写真 1・1971

¥ 1,900 (〒 110) 医学書院刊